

2021年11月分総評 杉本真維子

できるだけたくさんの詩と対話をしたいと思います。

「Power!Power!」と／啼くカラスが居り」(最上葉途) 山口県
たしかにこう聞こえることがあります。というより、これからはカラスの声はこうとしか聞こえないでしょう。

「席替えを終えて／ぼくらはまた違う／ひかりの放ち方をしている」(さいう) 愛知県
たしかに、席替えを終えるとよく知っているはずのクラスメートがいつもと違って見える。その違和感を、「ひかりの放ち方」というオブジェの配置を思わせる言葉が巧みに表現している。

「あきらめる／スパンスパンと／あきらめる／大根輪切りも 至極好調」(さくらママ ♪) 兵庫県
未練の尾のようなものにかたかが与えられ、それが「スパンスパン」と潔く切り離されている。諦めるというのも一つの大事な作業なのだと痛感。

「痛い飛んでけと／泣いてる娘を抱きしめる／私の中には何も無い」(ヒラノユリア) 神奈川県
まじないを唱える者は己の中身をカラにしておかなければならない。詩を書く者もまた同じなのだろう。

「夕焼けを閉じ込めてない私の目／失うように夕焼けを見る」(青野陽) 熊本県
「失うように」が秀逸。夕焼けを見るということは、その夕焼けを見ていなかったそれまでの「私」を失うことでもある。その自覚とともに生きていく世界は、しんどくも新鮮さに満ちているはず。優れた一篇の詩へと繋がる「目」を感じた。

「小林をコバヤシと言う口に花／詰めてお前をフローラにする」(小林奔) 神奈川県
「小林」と「コバヤシ」、「花」と「フローラ」などの重複部分に注目した。何も増えず、何も減らない退屈な世界を、言葉の力によって変えようとしている。

「自販機の灯ばかりを目印に歩く／真冬の月の無い夜」(猫谷圭希) 広島県
「自販機の灯ばかりを目印に歩く」というのはリアルな情景ではないはずなのに、なぜかありありと思い出せる。じつはこんなに遠い灯りと灯りのあいだの闇を、私たちは歩いているのかもしれない。

「霧雨と／分厚い直線の隙間から／そこだけ見える／托鉢の僧」(高橋ちひろ) 宮城県
極端に制限された視野と、そのなかに現れる「托鉢の僧」。このくるしげな視野が捉えているものは普遍的な何かだろう。惹きつけられた。

新しい書き手が続々と現れています。次回も楽しみにお待ちしています。